



ICU 高大連携事業について

～新しい形の高大連携を模索しながら～

広島なぎさ中学校・高等学校
教諭 斉藤 健一

平成27年度から広島なぎさ中学校・高等学校と国際基督教大学(以下「ICU」という。)の高大連携交流事業を開始した。以下、その概要について紹介したい。

高大連携に至る経緯

平成27年4月に本校へ来校されたICUの伊東辰彦教養学部長(当時)と本校の角島誠校長(当時、現在:鶴学園初等中等教育研究センター長)との間で協議が進められ、高大連携の締結が行われた。

ICUの設立理念に「国際的社会人としての教養をもって、神と人ともに奉仕する有為の人材を養成し、恒久平和の確立に資すること」とあり、本学園の建学の精神「教育は愛なり」、教育方針「常に神と共に歩み社会に奉仕する」という理念に共通点がある。また、ICUは献学以来、「対話」を通じて学問のテーマを明らかにし、学びを深めることを実践されている。本校も学園創立者である鶴裏先生の「異なる意見が共存するところに平和な社会は生まれる」という理念を具体化するため、様々な教育活動において「対話」を軸とした教育づくりを行っている。以上のように、目指す教育や校風に共通点があることが、今回の高大連携の始まりとなった。

高大連携事業の内容

事業内容は以下の5点である。

- ① 双方の教育についての情報交換にかかわる事項
- ② 双方の教職員や生徒(学生)の人的交流にかかわる事項
- ③ ICU教員による出張講義などにかかわる事項

④ 本校教員の大学での研修にかかわる事項

事業③については、平成27年度は高校3年文系クラスを対象としたモンゴメリ・ヘザー先生の経済学の講義、平成28年度は高校2年理系クラスを対象とした小瀬博之先生の生物学の講義が実施された。

事業④については、本校教員がICUに出張し、対話型授業の手法を学ぶ機会を持った。

本稿では平成28年度から開始した事業②を中心に記すこととする。

第1回高大連携プロジェクト

平成28年7月8日から9日にかけて第1回プロジェクトを行った。ICUからは伊東辰彦教養学部長(当時)、森島泰則アドミッションズ・センター長、そして3名の学生が来校された。

第1回プロジェクトの目的は以下の2点である。

- ① 双方の学生の交流を通じて、本校生徒がICUの学びに触れ、理解を深めること
- ② 双方の学生の意見交流を通して、平和について考えを深めること

1日目は、本校MP2ルームを会場に、高校1年から3年の生徒32名が参加し、ICUの学びに触れた。最初に伊東教養学部長(当時)からお話をいただき、交流会がスタートした。内容はICUの入試「総合教養(ATLAS)」(ICUホームページ参照)の音声講義を聴き、少人数のグループに分かれて提示されたテーマについて討論した。その際、ICU

学生が司会進行を務め、そのファシリテートスキルに本校生徒のみならず参観した教員も感心した。

2日目は、午後から教育開発部主催の原爆手記朗読劇「夏の雲は忘れない」を観劇した後、女優の方々、本校生徒(中学2・3年)、ICU学生との意見交流会を行い、原爆、戦争の惨禍への認識を深めた。森島泰則教授から女優の方々の見事な朗読に感極まったとの感想をいただいた。

2日間という短い期間であったが、ICU学生との交流を通じて本校生徒が大きな刺激を受けたことは言うまでもない。



第1回プロジェクト グループディスカッション

第2回高大連携プロジェクト

第2回プロジェクトは「2017 Heiwa Link」のタイトルのもと、春季休業期間中の平成29年3月20日から22日に行われた。

香港から、長い歴史と伝統を誇る男子校、Diocesan Boy's School(以下「DBS」という。)を迎え、日本の大学生、高校生、そして香港の高校生が国境を越えて「平和」についての意見交流を行った。NPO法人「これからの学びネットワーク」の福岡奈織氏(本校卒業生)の協力も得て、本校生徒による平和ガイドや体験型ワークショップも取入れながら交流を深めた。また、DBSの高校生4

名は、本校生徒の自宅へホームステイし、日本の文化に触れてもらう機会も設けた。第2回プロジェクトの内容は以下のとおりである。

- 19日 ICU(学生4名、森島泰則教授)、DBS(学生3名、教員2名)、ウェイミン夫妻(ウェイミン・ユアンさんはDBS、ICUの卒業生でDBSとの交流の仲介をいただいた)が広島駅に夕刻到着、ホストファミリーと面会
- 20日 ● 開会式
(場所:本校MP2ルーム)
● 自己紹介・プレゼンテーション(本校の紹介/香港の紹介)
● お好み焼き実習(場所:本校調理室)
● ウェイミンさん講演
● 宮島散策(グループに分かれて自由散策)
- 21日 ● 平和公園・平和記念資料館ガイド
● 被爆伝承者の講演(場所:鶴学園広島校舎)
● グループごとに本通りを散策
● ワークショップ①「ピースクリエイターになろう」(場所:鶴学園広島校舎)
- 22日 ● ワークショップ②「平和って何だろう?」(場所:本校MP2ルーム)
● 伊東教養学部長(当時)、ウェイミンさん講演
● 閉会式・写真撮影



第2回プロジェクト DBS宮島散策

第2回プロジェクトには、本校生徒9名(高校1年から3年の各3名)が3日間すべての交流に関わった。特に3年生は3名ともICUへ進学する生徒であり、大学入学前に進学先の大学生や教授と交流できる良い機会となった。また、香港の高校生との交流もあるため、12月から事前学習を定期的に行った。事前学習の内容は、自己紹介を



第2回プロジェクト 生徒作成冊子

広東語で行うこと、香港の文化、歴史について学習すること、「広島」を紹介する冊子を作ることに3点であった。高校1・2年の生徒は学習や部活動、ほかの学校行事の準備と並行しながらの準備であったが、特に広島紹介の冊子は素晴らしいものができた。



第2回プロジェクトの様子



第2回プロジェクト 意見交流

22日のワークショップでは9名の生徒のほかに、中学2年から高校1年までの生徒が募集をかけたところ、18名の生徒が希望し参加した。高大連携プロジェクトに初めて参加した中学生は戸惑いを見せていたが、ICUの学生のリードのもと、英語で積極的に話しかけ、時間を追うごとに打解けていった。

国が異なれば「平和」の定義や捉え方が違うことを知り、そして自分たちが「平和」について自問自答し、明確な意見を持たなければならないことを自覚させられたようである。生徒からこれらの感想を聞けたとき、第2回プロジェクトの目的を果たせたように思えた。なお、第2回プロジェクトの様子は朝日新聞(3月24日朝刊)と中国新聞(4月3日朝刊)に掲載された。

今後の展望

ICUの伊東教養学部長(当時)が、第2回プロジェクトの閉会式で「若い世代が国境を越えて、平和について対話する場を持ちたいと長年思っていた。その思いを果たせることができた」と語られた。高大連携事業における学生間の交流の最大の目的は「対話を通じて平和を希求すること」である。平成29年度の交流プロジェクトについても検討段階に入っている。本校とICUの高大連携事業を充実させるため、創意工夫していかなければならない。

平和都市「ヒロシマ」に位置し、「常に神と共に歩み社会に奉仕する」という教育方針をもつ本校がこの目的を果たす役割は大きい。